

大豆生田君のこと

米国自治領プエルトリコ大学博士研究員 池上 努
(前 理論研究系分子基礎理論第一研究部門助手)

はじめて分子研を訪れたのは、修士二年目の夏のことだから、もう十年近く前になる。琵琶湖での分子科学夏の学校に参加した後、美斎津さんに無理を言って、分子研を見学(見物か?)させてもらった。実験棟をひと渡り案内していただいたあと、西先生のお部屋にお邪魔してお話を伺った。強い感銘を受けたことを憶えている。その日は美斎津さんのアパートに泊めてもらった。結婚される直前のことだったと思う。今、思うに、ずうずうしい奴である。博士課程を分子研でとるシタゴコロもあったのだが、結局、エレベータ式に進学してしまった。ところがその三年後、分子研の、今度は理論系にやってくるのだからアラ不思議。そのまま六年、居座ることになるのだから世の中わからない。

ひと所に六年も暮していると、およそいろんなことが起きる。その中でも特に後味の悪かった思い出を書いておこう。主人公は大豆生田君という。大豆生田君は鳩である。名前はついさっき付けたところだ。彼にはじめて会ったのは、三年前の冬である。その前にも会っているかしのれないが、憶えちゃいない。当時、借りていた下宿は、建物に入っすぐの所が吹き抜けになっていて、高い所に明り取りの窓があった。大豆生田君はその窓の縁に越してきた。越しては来たものの、どうもそこが気に入らぬ様子である。しきりに窓に向かって体当たりしている。「すぐ下に出口がありますよん。」出掛け際にひと声かけてみた。

翌日。部屋を出ると、ばさばさ音が聞こえる。大

豆生田君である。二百三高地もかくやの突撃を繰り返している。不屈の闘魂である。がんばれ、大豆生田君。負けるな、大豆生田君。しかし所詮、鳩はハト。ガラスには傷ひとつ、付いていない。「こけてよるけて落ちてくるかも。」とりあえず放っついて、出掛けてしまう。冷たい奴だ。

鳥は弱ると膨らむというのは本当である。そのまた翌日、大豆生田君は前日比、約 1.2 倍に肥大している。こちらを向いたその姿は、まるでふくらまずめだ。思い出したように繰り返す体当たりにも力がない。二、三本、飛び出した羽も、憔悴感に彩りを沿えている。ことここに至ってようやく対策を考えた。しかし、いい考えが浮かばない。棒の先に籠をくくり付けて突き出してみたけれど、大豆生田君、おたおたと逃げ惑うばかりで、降りてこない。小一時間も振り回したら、目が回ってしまった。放り出して出掛けることにする。飽きっぽい奴だ。

その夜、帰ってきたら、もう動かなくなっていた。冗談の好きな大豆生田君のことである。死んだ振りをしているのかもしれない。だがもう二度と、体当たりをすることはなかった。

今、住んでいる所は鳩が多い。道に伸されて平べったくなっている奴もいる。そんな鳩を見ると、大豆生田君のことを思い出す。思えば間抜けな死に様である。けれども、そんな彼を嗤えない自分がそこにいる。